

空き町家で ゲストハウス

空き家となっていた大津市中心部の町家が来春、外国人観光客を主なターゲットとしたゲストハウス「大津町家B&B粹世」に改装される。大津市内では初めての試みで、急増する外国人観光客の受け皿になると同時に、空き家を使った地域活性化につながると市も期待を寄せている。

大津に外国人観光客を



①大津町家B&B粹世の完成予想図②ゲストハウスに改装される伝統的町家(大津市長等3丁目) 撮影・薄田和彦

来春改装 日本文化体験拠点に

事業は米原市の建築設計事務所「湖北設計」が取り組み、経済産業

省の「商店街・まちなかインバウンド促進支援事業」に採択された。建物は昭和初期までに建てられ、米穀商が住宅として使用していた木造2階建ての町家で、敷地面積は385平方メートル。通り庭や火袋など、伝統的な町家様式を残しており、将来的には建物を登録有形文化財として申請していく方針だ。宿泊施設に改装するに当たり、一部は洋室に改める。「B&B」は宿泊と朝食を提供する形式で、定員は最大20人。宿泊者が茶道体験などでもできるコミュニケーションスペースを設けるほか、英語を話せるスタッフが24時間常駐する。宿泊費は3500〜6500円。市中心部には約1500軒の町家があり、このうち1割程度は空き家となっている。今回は町家バンク「大

津百町・町家しょうほうかん」に登録された物件を湖北設計が買い取り、事業化を決めた。昨年、大津市内で宿泊した外国人観光客は過去最高の約15万5千人(前年比74%増)に達し、年々増加している。しかし、多くは京都観光のために宿泊しているとみられ、市内での滞在時間を増やすことが課題となっている。湖北設計の世一康博営業主任は「京都に行かなくても大津の老舗や商店街でさまざまな文化体験ができ、その拠点のような宿泊施設にしたい」としている。

(小川卓宏)